

## 秋山好古校長 北豫中学校が城北の名門校に変身

清水 正史  
Masafumi Shimizu



秋山好古校長

司馬遼太郎著『坂の上の雲』の主人公の一人である秋山好古は、日本騎兵隊を創設、日露戦争に殊勲を立て、陸軍大将などを歴任した。秋山が現在の松山北高等学校の前身である私立北豫中学校の第四代校長となり、同校発展に尽力したことは、卒業生はじめ中予地区在住者には周知の事実である。

北豫中学校は、城哲蔵（哲三）が明治三十三年一月二十四日、文部省の認可を得て鉄砲町（現在文京町）に創立した。発足時の生徒数は一八〇人（五学年）、開校は四月十七日であった。

城は開校のころから体調を崩し、学校は経営危機に陥った。窮状を知り、井上要・白川福儀らは、明治三十四年「社団法人北豫中学校」を設立し、学校の経営安定のため、校舎・校地の拡張を計画し



秋山校長時代の北豫中学校校舎

議院議員・貴族院議員・松山市長を歴任した加藤恒忠である。加藤恒忠は井上要・門田正経・秋山好古・新田長次郎と連携しつつ加藤彰廉を口説き落とすことに成功した。

新任の加藤校長は、就任早々、学校の移転拡張計画を建てた。計画が実現していたら、現在のJＲ松山駅南東に学校が出現していたはずである。場所は市民病院のあるあたりと推定される。井上要は、大蔵大臣勝田主計、陸軍大将秋山好古、貴族院議員加藤恒忠、旧藩主久松家家令の内藤家などに相談した。彼らはいずれも移転反対で

あり、なかでも秋山は移転資金の裏付けがないとして強く反対した。井上は神戸の勝田銀次郎や大阪の新田長次郎から融資の約束を取りつけた。井上は再度移転計画推進を打診したが、秋山は借金でなく基本金でなければならぬと強く反対した。このような経過で北豫中学校の移転拡張計画は実現しないままに終わった。加藤恒忠から石原操への手紙で様子を推測できる。北豫中学校の裏面史とし

た。井上要は伊予鉄道三代・五代社長で県議会議長、衆議院議員に選出された政財界の重鎮である。白川福儀は海南新聞社長、県議会議長、松山市長の経歴をもつ人物である。白川は明治三十七年から大正五年（一九一六）まで校長として在職した。白川は「剛健で、根気強い青年を作ること（質実剛健）」の校風育成に努めた。しかし当時の海南新聞には、目標に程遠い学生の行状が散見される。学生の質は悪かった。

明治四十三年二月新築の本館に校長室・教員室・事務室が移転した。同年七月二十三日、のち四代校長となる秋山好古が訪問している。

大正五年、加藤彰廉が三代校長に就任した。加藤に校長就任を要請したのは、正岡子規の伯父で衆議院議員・貴族院議員・松山市長を歴任した加藤恒忠である。加藤恒忠は井上要・門田正経・秋山好古・新田長次郎と連携しつつ加藤彰廉を口説き落とすことに成功した。

新任の加藤校長は、就任早々、学校の移転拡張計画を建てた。計画が実現していたら、現在のJＲ松山駅南東に学校が出現していたはずである。場所は市民病院のあるあたりと推定される。井上要は、大蔵大臣勝田主計、陸軍大将秋山好古、貴族院議員加藤恒忠、旧藩主久松家家令の内藤家などに相談した。彼らはいずれも移転反対で

あり、なかでも秋山は移転資金の裏付けがないとして強く反対した。井上は神戸の勝田銀次郎や大阪の新田長次郎から融資の約束を取りつけた。井上は再度移転計画推進を打診したが、秋山は借金でなく基本金でなければならぬと強く反対した。このような経過で北豫中学校の移転拡張計画は実現しないままに終わった。加藤恒忠から石原操への手紙で様子を推測できる。北豫中学校の裏面史として

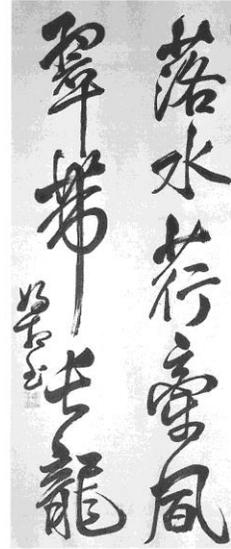


現在の松山北高校本館



秋山好古墨跡「荒怠相識」

秋山好古墨跡「落水行牽風  
翠帶長龍」



秋山好古騎馬像

秋山好古先生の英姿

本校の前身である北予中学校の  
第四代校長として大正13年より  
昭和5年まで教育に専念された。  
昭和4年12月東京 国本産業株式会  
社

した中学校は、全国にも前例がない出来事であった。秋山の校長在職期間は六年に及んだ。その間、北豫中学は大発展を遂げた。  
大正十二年三月二十日、生徒定員八〇〇人（従来六〇〇人）とすることが認可された。松山高等商業学校貸与の校舎が返還されれば（大正十三年四月十四日返還）、空

き校舎の活用ができるが、二〇〇人の増員により更なる投資が必要であった。大正十三（一九二四）年六月、四七四坪を購入して校地を拡大した。大正十四年には二〇学級、生徒数一千名に増員した。昭和二年十月二十日には、松山高等商業学校から校地四四八坪を購入した。  
北豫中学がこのように急速な発展を遂げたのは、秋山好古の存在

であった。日本陸軍騎兵隊の生みの親であり、郷土の生んだ英雄というだけでなく、秋山の教育的信念とその教育力の大きさであったといえよう。  
秋山校長は無休主義であり、老齢にもかかわらず、一日も欠勤したことがなく、毎日の勤務も、時間厳守で時計のように正確に登校した。白馬にうちまたがった馬上豊かな秋山校長の威厳に満ちた姿が、当時の生徒達や沿道の市民達の目に焼きついている。服装も実に端正であった。校長の率先垂範は、自然に職員・生徒達に感化を及ぼし、職員の欠勤、生徒の欠席は著しく減少した。  
秋山は日頃より、英国のイートン・ハロー等の中学が私立であり、社会へ多くの人材を送り出していることを例にあげ、私学の特殊性と必要性を強調していた。秋山が校長に就任する以前から、県立移管の話が出ていたが、秋山が常に反対してきたのも、権威ある地位にありながら田舎の一私立中学の校長に甘んじたのも、この信念によるものであった。

司馬遼太郎は『坂の上の雲』で秋山好古の最後の様子を「病名は糖尿病と脱疽である。左足の痛みがはなはだしく、当人は最初は神経痛だろうとおもっていた。（略）医師たちは左脚を切断することにずいぶんためらったが、結果はその手術をおこなった。（略）同郷の軍人で白川義則が見舞いにくたとき、好古の意識は四十度くらい高熱のなかにただよっていた。（略）「奉天へー」と、うめくように叫び、昭和五年十一月四日午後七時十分に没した」と記している。

しみず・まさふみ 一九四一年、正岡村（現北条市）に生まれる。関西学院大学文学部史学科卒業後、昭和三十九年より愛媛県の高等学校教員として勤務。現在は愛媛県立松山北高等学校教頭。愛媛県史や松山市史などの編纂に参加、近世新田開発・交通史などを研究。